

比較文学管見

江 口 清

比較文学は各人それぞれの定義をもつと言われている。これは斯界の発展にたいへん望ましいことであって、私も驥尾に付して、私なりの所見を述べることにする。もとより先人の諸見を総合し、斟酌したものにはすぎない。

Littérature comparée とは、一国の文学（作家なり作品なり）が、他国の文学に及した関わり合いの研究を目的とする学問である。一国の作家なりその作品なりが、他の国の作家および作家たち、それらの作品にどのような影響を及したか（発動者 *émetteur*）、逆から見ればどのような影響を受けたか、どのような模倣をしたか（*récepteur*）、また両者のあいだに翻訳などの媒介者（*intermédiaire*）があったかどうか、その媒介者がどのような働きをしたか、それぞれの作品のテーマ、構想、プロットの立て方、場面や描写、さらに考え方や表現に至るまで実証的に比較検討するのである。

影響には本質的に作者に及した影響、つまり影響を受けた者の身内に溶け入って、ある一定期間持続的にその者の裡に存続しているものと、等しくテーマや、構想、プロットの立て方、場面や描写に至るまでの類似現象を示しながらも、その働きが一時的な現象に止まる影響とをはっきりと区別する必要がある。いずれにしても影響は《影響を受ける》という言葉が示すようにあくまでも受動的であり、無意識のうちに《他》を受け入れたものを吐きだした結果であり、模倣は《模倣する》という言葉が示すように能動的であり、意識して《他》を進んで採り入れるわけである。それゆ

え影響を及した源泉 **Source** を極めることによって、模倣や剽窃のからくりまでも判明することがあり得る。

比較文学はあくまでも一国の文学研究の方法の一つであって、国文学史の補足をするわけで、文芸批評ではない。一国の文学史上の特殊な部門であり、外国文学との関係を扱うだけであって、文学の本質論や価値論をするものではない。従って一国内の作家相互間の関係は、たとえ古典作家と現代作家のあいだの関係であっても扱わない。二国間の関係にしても、現実に関わり合いのないものは取りあげない。**Shakespeare** と近松は、本来なら **Comparative Literature** の対象とはならないわけだが、但しこの両者を演劇という観点なり共通のテーマという見方からして傍証を固めてゆき、類似現象を取り上げて、これに比較する意味を与える対比研究 **parallel** となれば別である。鷗外と **Mérimée** は一見すこぶる似通った作家であるが、両者のあいだになんら影響関係はない。しかし両者の史伝物について類似現象を直感的に且また印象的に捉えて考証を進め、両者の裡に本質的に共通するものは何かを明らかにし、そうすることによりメリメ論、鷗外論一つだけよりも更に強固に結論を導き得たとすれば、文学研究上りっぱな効果を挙げたわけである。つまりメリメの作品だけでは絶対的な価値判断の規準を求め難いが、これに鷗外の作品を並べて論ずることによって、両者に共通するもの、一つの普遍性が得られることから、その規準もはつきり知り得られるというわけである。

対比研究をさらに広く解釈すれば、思想とか感情とかの普遍性を考慮に入れた対比研究も考えられる。時代を隔て、場所を異にして、近似的な素材、**motif**, 作意, **idée** を持つ作品が二つあるとし、それらは普遍的な人間性に根ざす思想感情から発したのだが、それが作品となると、表現の形が違ってくる。この違った形を採るに至らしめる諸条件を吟味することからして、一つの成果が期待される。例えば “**chanson de geste**” 武勲詩『ローランの歌』(11世紀後半)と、わが国中世の代表的な軍記物語『平

家物語』とが、ともに＜滅び＞に寄せる哀歌をうたった＜語りもの＞であり、戦闘と死とをテーマにしているので、二つの作品を比較して「西洋風と日本風の現れ方の対比」を試みるわけである。これは旧フランス派の実証主義的、歴史主義的な比較文学には求められないものであって、世界文学の中の日本文学の位置づけという点で、今後の研究課題である。

類似性をもつ文学作品が生れるということは、これを生んだ作者らの裡にある心情の普遍性に起因する場合と、作者の位置する社会的、文学上の環境、または政治的、風土上の諸条件に起因する場合の二つの原因が考えられる。従って影響関係のない類似現象も当然考えられるわけであって、今後は同時発生という場合も、必ずしもあり得ぬとは断言できない。また影響といっても文学作品の影響だけではなく、思想や文化の一般の影響も扱うわけで、Zola の作品の影響と同時に進化論の思想から *naturalisme* に及した影響も問題になるわけである。旧フランス派は研究対象を近代に限定し、現代及び中世は除外していたが、最近は是正された。Claude Pichois, André M. Rousseau はこう言っている。「われわれは国文学史乃至比較文学と世界文学の間を時計の振子のように往き来する。この二者は互いに持ちつ持たれつの関係にある」と。

Source の研究を逆の方向に伸して行くと、ある作品が外国の作品に与えた影響の結果、つまり運命 *fortune* または名声 *renommé* の研究ということになり、これも比較文学に継承されたが、わが国のような翻訳の盛んな国にあっては、今後の大きな研究課題であろう。源泉研究が作品の制作過程調査の一環として、いわば内行的に行われるのに対して、運命研究は作品が生まれ出た後から後の命を外的に追って行こうとするのである。作者を離れた作品は、あるものは死に絶え、あるもの生きつづけて、海外にまで大きな影響を持続している。その《持続》の太くて長いものほど偉大であると言えるであろう。ここから「世界文学研究」に発展する。世界文学と比較文学とは、けっきょく一つの楯の両面であり、理想主義的である

「世界文学」と、実証主義的な「比較文学」は表裏一体となって、はじめてその機能が発揮される性質のものであることが理解されるであろう。世界文学と比較文学の関わりについては、小林路易氏がシュトリヒの『文学と文明』の所説を補訂して四大別していられるので、それをかいつまんで次に記す。

- (一) 質としての世界文学の立場からすれば、世界的な文芸価値を考え、一定基準以上に達していると考えられる作品が、世界文学と呼ばれることになる。その基調はゲーテの説く「世界文学」の精神を受け継いだといってよく、国民性を持ちながらも(国民文学)、それを超越する普遍的要素をもち、世界中にひろく普及し、超時代的に愛読されるようなものが世界文学ということになろう。例えば、Odysseia は、もっともギリシア的であると同時に人間的な普遍性をもち、Dante: “Divina Comédia”, “Hamlet”, “Don Quijote de la Mancha”, “Faust”, “Fleur du mal”『復活』などもそれぞれの民族性をよく表しながら、普遍的な人間性を豊かに含んでいる。そして時間的、空間的な意味における世界的な広がりの中で名声を保ちつづけている。
- (二) 量としての世界文学、この方が(一)の質的な世界文学の規定が価値の相対性のゆえに決定的に定め得ないのに比べれば、まだしも決定が容易でる。例えば Jules Verne の場合。「量としての世界文学」を学問体系の一部と考えると、とかくその成立に疑義が生じるので、もっと軽い気持で世界の文学を見渡し、Homēros から Wilde まで、さらに Camus までの世界の名作を自国語の翻訳で読み、教養として世界的な文学の視野を獲得しようとする考え方は、ことにアメリカでひろがり、Littérature Générale 一般文学と呼ばれて、カレッジの文学、または人文科学教育の大きな一翼となっている。
- (三) 観念としての世界文学は、独仏の文芸学として、今後の発展が予見される。ドイツでは文学研究は哲学の一分科の観があり、フランスでは歴史の一分科の観なしとしない。Dilthey 以後の「ドイツ文芸学」と、Lanson 以後の「仏文学史」におけるこのような一般的傾向は、まず否定できないと見るのが妥当であろう。
- (四) 歴史的事実としての世界文学。ドイツ系の文芸研究が、世界観、精神、意味、様式、構造、genre, thème などの概念的な文芸要素を中心に考察をすすめるのに

反して、フランス系の文芸研究では一作家、一作品、一テキストが中心であり、文献が出発点であると同時に帰着点となる。ドイツ文芸学では研究素材として第二義的に見られる歴史的事実が、フランス派では第一義的になる。そこから精神的な『シェイクスピアとドイツ精神』(フリートリヒ・グ・シドルフ, 1911年)と、実証的な『フランスにおけるゲーテ』(バルダンスベル・ジェ, 1904年)の相違が出て来る。フランス派では、国境を越えるのに実際の《影響》の糸を手繰ってゆき、因果関係が終わるところで比較研究も終わる。フランス派に関する限り、《比較》は二元的、並立的な比較ではなくて、一元的な、作家・作品・テキスト・思潮研究の過程での副次的な操作にすぎない。研究は、シェイクスピアなりゲーテなりに焦点がおかれて、彼らが外国から受けた影響または外国に与えた影響の線に沿って、一方通行的に進められる。二元的な様相を呈するのは、ただ影響を受けた側、与えた側、およびそこに介在する媒体の三者のうち少なくとも二者が絶えず視野の中にある、というだけのことにはすぎない。この派の実際の性格は、もっとも「比較文学」の名称からは遠く、正しくは「文学における国際的影響の研究」とでも称すべきであろう。しかしながらこのフランス派の比較文学は、文献的事実の実証という最も具体的な研究内容と普遍性をもった研究方法のゆえに、20世紀の前半を通じて驚くべき業績を挙げた。すなわち作家の超民族的な性格を実証し、模倣・剽窃^{せつとう}の事実を指摘し、外国文学の伝播・摂取^{でんぱ・せつしゆ}の様相を明らかにして、いままで顧みられなかった文学交流の担い手たちの姿を明るみに出したのである。

最後にその研究方法に就き簡単にしるす。

(一) Bibliographie, 文献学的方法を用いて実証的に行うことは、文学研究の最もオーソドックスな研究方法である。まず原典をよく読み、自分のものにしておかねばならぬ。そして受容者の全集(作者生存中の全集と死後刊行の全集の相違)中から源泉に関わり合いのある項目を抜き書きし、それを受容者の年譜に順じて並べ、それらに対する他者の批評を添えて考察してゆけば、必ずなんらかの結論に達するはずである。結論は「影響が無かった」でもいい。影響がなかったことがわかったことも、研究の成果である。[坂口安吾と外国文学]

(二) 統計的研究, 「比較文学」第一巻(1958年刊)『影響の測定』中島健蔵氏式の

方法に拠れば、その全作品、日記、書簡に現われた外国作家、作品名の頻度数^{ひんどうすう}を年度順に表に現わすに止めず、さらに集めた関係文献のカードを刊行順に並べ、それらの資料の質と量とを社会機能的に、形態的に（つまり原文のままの翻刻もあれば、完訳、抄訳、意識、ダイジェストもあるので）《群》に分類し、発表の形式、流通規模（読者の量）、その持続性（時間, fortune）を記号で分類する。例、Bは単行本、Jは定期刊行物、それを更にQクォーターリー、M月刊、W週刊、D日刊に細分する。内容的にはLは文学的、Sは特殊なもの、Gは一般、Tは翻訳、Cは批評の類。これらを縦軸にし、横軸に発表年月を刻んでグラフを作る。こうすることによって例えば Joyce がいつごろから、どのようにして日本に移入され、普及し、飽和状態に達し、溶けこんだかがわかる。このグラフと、文献表、年譜を参考にして読み合わせることが必要である。

なんといっても発動者か受容者かどちらか一つでも（両者ならそれに越したことはないが）精通していることが大切である。それと精励さ、絶えざる努力。作者自身が言ったり書いたりしていることでも信用ができない——実証し得ざれば疑ってかかること。ただし思いつき、もしくは当てずっぽうに発動者・受容者間に関わり合いをつけるのは厳に戒しむべきは言うまでもない。〔本稿は学生に読ませるためのノートであることをお断りしておく〕

参考文献

- 『比較文学講座Ⅰ』中島健蔵，太田三郎，福田陸太郎編集，清水弘文堂刊。
『比較文学——方法と課題』早稲田大学比較文学研究室編，早大出版部刊。
『世界文学と比較文学』渡辺格司著，第三書房刊。
『比較文学あれこれ』江口清，「すばる」11号。